

北川 フラムの「対談」

西 雅秋「超・刻へ」+ 「大地の芸術祭2006」再生民家のアーティストたち -連続6回シリーズ- 第4回 2007年(平成19年)1月12日(金)

まちづくりの実践

直島での経験に基づいた考え方の講演

お年寄りが生き生きと元気になる、これが正しいまちづくり

北川一郎  
福武總一郎  
×  
北川 フラム

連続6回シリーズ

講演する福武總一郎氏

北川一郎 今日これから直島の家プロジェクトの説明を福武さんにしていただきます。今回大地の芸術祭は福武さんが本当に頑張ってくださいて、大地の芸術祭及びこへびおおへびに大きな力を与えてくれました。

福武一郎 又新たな直島のスタートをしたいと思っています。里海の瀬戸内海、里山の越後、それがうまく呼応しながら、いい意味の協調をしながら日本の原風景、そして日本のすばらしさ、現代美術の持つ可能性、そして何よりも、今まで全くなった新しい地域づくりのモデルを世界に問いたいと思っています。

私が直島に関わるようになり、地域づくりにはない。直島の場合は、いろいろな試行錯誤というものがあり、現代美術は非常に地域づくりにいい結果をもたらすことがわかった。もつと率直な言い方をすると、私はまちづくりというのは、今まで都会というか若

者中心で基本的に考えられたと思うんです。それは間違いだと思います。若者中心のまちづくりは、東京大阪だけで十分で、それが正しいまちづくりかといえば、まったく間違った考え方だということを断言できるんです。じゃあ、どういうまちづ

くりが正しいかというと、越後、直島の活動を通して、やっぱりお年寄りが生き生きと元気になる、これが正しいまちづくりだと思ったんです。お年寄りが元気になつてないのは全部偽のまちづくり。実現してるのは、直島と越後くらいしかないと思つてます。

アートによって理想の楽園を作りたいんです。要するに直島も越後も、選民された空間ができる。要するに知的レベルが高いと。こういったことができる面白さ、そういう地域ができる可能性があると思ってるんです。そのためには、さつき申し上げたように、お年寄りが元気だ、ではお年寄りが元気というはどういうことか。それは、自然と歴史、そして今まで住んでいる地域をそのまま大事にする、あるものを活かしてないものを作る、という考え方。自然と歴史と今の生活だけを重んずるだけでは、若い人は来ないし、元気になるわけない。そこに

現代の関わりあるものを持つてこようと思ったんです。それは現代美術です。それは現代美術しかないと思ったんです。

現代美術というメディアは自然や歴史がある場所、あるいは古い町のようないくつあることで、メッセージを発信するんです。又、直島にかほちゃんがありますが、何で海にかほ

ちがあるんだ、と。それでいいんです。常識を疑えばいい。現在の既成の概念を破る、そういうことにも現代美術の持つ意味があると思つたんです。

家プロジェクトについて、そういう中で、歴史や自然に対してもう一つはやはり生活。人々が住んでいた歴史は民家にあるわけです。奈良や京都には生活の感じをしないんです。公家さんとか坊さんとか。あつたかみを感じないです。そういうことより、瀬戸内海の島々、あるいは越後にあるような所こそ、日本の原風景が残っていると言うんです。近代化に汚染されていない、自然と共に、自然を見方にしながら、生活をしてきてるその生き様みたいなものが、住まいなり家に残つていると私は思った。そこは、どんどん朽ち、崩れていくてる。それを再生をしたいというのを最初に思つた。地域づくりの中で。単なる保存ではなく、現代美術を入れることによつて、あるものを活かしてないものを作るというメッセージ性を発信できればと、思つたんです。

越後あるいは直島の持つているものをうまく融合していくことで、お互が呼応した新しいプロジェクトができ、それが何年に一回か世界的なイベントができることで、アジアをはじめ世界の人達がそこで集うような、そういうものができないかと感じております。

北川一郎 そういう中で、21世紀はもう一度都市と地域がどうやっていくかと真剣に考えないといけない。いろいろな地域が呼応しだして、とにかく自分のいる場所からやるしかないと。みんな手伝つて、何とかそれを活かしていこう、となつてきてると思います。

## 第4回

## 直島家プロジェクト

福武總一郎  
(ベネットセコード・ボレー・ショーン)

## 北川 フラムの「対談」

## 歴史、自然、もう一つは生活

歴史とは民家(生活)にあるわけです